聖書から見た男女の平等

フィリップ・B・ペイン（Philip B. Payne）

2015年／2023年

英語からのドイツ語訳

ドイツ語訳：Hans-Jörg Ronsdorf

フィリップ・バートン・ペイン（Philip Barton Payne）の好意ある許可による

ドイツ語版校正：ヴォルフガング・クレックナー（Wolfgang Klöckner）

ズルツベルク、2026年10月

第2版・改訂版（初版2023年7月）

Eメールでのご注文

hj-ronsdorf@t-online.de

お電話でのご注文：08376 929643

1冊3.80ユーロ（送料別）

www.hans-joerg-ronsdorf.de

ISBN 978-3-9820715-8-9

目次

1 序文

21世紀になってもなお、信仰告白を重んじ聖書に忠実なキリスト者たちの間で、神の国において、社会において、家庭と結婚において、性別が違いをもたらすのかという問題が感情的に議論されているのは、驚くべきことではないでしょうか。あまりに激しいので、まるで福音の根本的な真理や聖書の権威が問われているのかと思うほどです。まず言っておきます。男性と女性は確かに異なります。それは疑問の余地がありません。しかし明らかにしなければならないのは、こういうことです。男性には女性に対して、指導的な、あるいは優先的な地位が与えられているのでしょうか。そして、そこから、女性は男性も教会も教えたり指導したりしてはならない、という結論になるのでしょうか。

事実として、教会はこの問題に絶えず直面しています。つまり、女性と男性が集まるたびに直面するのです。その意味で、この問題は二次的なものではありません。ある人々にとっては、指導し教える権限は男性にあります。別の人々にとっては、どちらの性別であるかは何の違いももたらしません。一つの教会でこの二つの見方を両方とも実践することは、ほとんど、あるいはまったく不可能です。ですから私たちは、もう一度聖書のテキストに立ち返らなければなりません。もう何度もそうしてきたのですが。それでも、もう一度試みてみましょう。

神学者であり言語学者でもあるフィリップ・B・ペインは、私たちを聖書を巡る短い旅に連れて行ってくれます。この問題について彼に考えを改めさせたのは、聖書でした。その理由をお読みください。彼はこの問題について何冊かの本を書いています。[1] いまあなたが手にしているこの小冊子には、2015年に雑誌 Priscilla Papers[2] に掲載された論文が収められています。このドイツ語版のための著者の序文（「私の遍歴」）では、いくつかの比較的新しい発見が取り上げられています。

この小冊子の題名は、どの立場が主張されているかをはっきり示しています。それは、平等主義の理解する創造の秩序を短くまとめたものです。すなわち、男性と女性は同等の権利を持ち、同等の責任を負っているということです。性別に基づく階層的な不平等はすべて、福音に反するものとして、聖書的でないとして退けられます。

目を引くことがあります。英語圏では近年、かつていわゆる補完主義の男女観を主張していた男性たちによる本が出版されています（巻末の推薦図書を参照）。この見方によれば、教会で指導し教えてよいのは男性だけです。しかしこれらの著者たちは、その後、補完主義の見方を完全に捨てました。彼らにとって、聖書が唯一の基準です。彼らは、現代社会に何が好まれるか、どうすれば文化に迎合できるかを問うたのではありません。むしろ、聖書に何度も問いかけ、研究したのです。その結果は一致していました。聖書は、無条件に、男女の平等を教えているということです。あらゆる関係において。あらゆる場所で。あらゆる時代に。エデンの秘密は、両方の性がそれぞれ異なる強みを持ち寄ることにありました。エバは、同等の権利を持つ対等なパートナーとして、アダムに欠けているものを補います。そしてもちろん、その逆も同じです。

男性と女性を序列で考えることを終わらせる時が来ています。その考え方はキリスト教的な色合いを帯びてはいますが、古代の世俗的な文化に由来するものです。たとえそれが何世紀にもわたって聖書の真理として示されてきたとしてもです。キリストにあって、それは決定的に終わりを告げました。キリストによる救いの秩序は、もともとの創造の秩序を回復し、古代から現代に至るまでのあらゆる社会的差別を終わらせました。永遠に。教会において、新しい創造において、性別の違いは、もはや不利益、分離、上位や下位に置かれることの理由にはなりません。奴隷と主人の違い、ユダヤ人と異邦人の違いについても同じことが言えます。すべての人は、ありのままの自分であり続けます。けれども教会の中では、こうした特徴はもはや何の違いももたらしません。たとえ社会の中では、文化や国によって、残念ながら今なおある程度は違いをもたらしているとしてもです。

補完主義の見方を持ち、それを生きている方であっても、一度、先入観を持たずにフィリップ・B・ペインの考えをたどってみていただけたらと思います。

私自身も、数年前に考えを変えなければならなかった者の一人です。継続的で集中的な聖書研究のゆえにです。私はイエスを愛し、聖書を愛し、50年近く聖書を学んできました。私は自分の歩みを一冊の本にまとめ、ホームページには、無料でダウンロードできるさらなる資料を集めました。www.frauen-vergebt-uns.de

フィリップ・B・ペインの言葉に入る前に申し上げます。これほど多くの激しい感情をかき立てる問題は、ほとんどありません。だれもが、神とそのみことばの前で「それぞれ自分の心の中で確信を持ちなさい」（ローマ14:5）。しかし明らかに、事態はそれほど一義的ではありません。いく

つかの箇所では、前提を置かなければならず、その前提がこちらの方向へ、あるいはあちらの方向へと導くのです。ですから、すべての人に向けて呼びかけます。冷静さを保ち、耳を傾け、よく考え、議論をしっかりと根拠づけ、灰色のところ――つまり一義的でないところ――で白黒をつけるような考え方をしないようにしましょう。私たちが基準とすべきなのは、聖書全体の証言であって、二つか三つの節だけではありません。

私たちがこの問題についての真理を、私たちの救い主であり神であるお方の口から聞く日が来ます。私はそれを楽しみにしています。そのとき私たちは、自分自身についても申し開きをしなければなりません。そのときに誤りだと判明したことは、もはや償うことができません。

Hans-Jörg Ronsdorf、アウクスブルク、2023年6月

2 私の遍歴

私が育った教会は、男性だけによって指導されていました。しかし私の最大の心配は、自分が永遠のいのちを持てるかどうかということでした。カリフォルニア州マウント・ハーモンのレッドウッド・キャンプで、このことをユースリーダーに打ち明けたとき、彼は私にヨハネの福音書3章16節を読ませ、それから、イエスを信じているかと尋ねました。私は「はい」と答えました。すると彼は「あなたは永遠のいのちを持つだろうか」と尋ねました。私は「それが問題なのです。わからないのです」と答えました。彼は「もう一度読んでごらん」と言いました。それから同じ二つの質問が続き、私も同じ二つの答えを返しました。彼は再び「もう一度読んでごらん」と言いました。今度こそ、ついに私にはわかりました。「御子を信じる者は、滅びることなく、永遠のいのちを持つ」――これは神の約束なのです。私はひざまずいて祈りました。「父よ、あなたの約束を信じないことで、あなたを偽り者にしてしまったことをお赦しください。」私は救いの確信の喜びに満たされました。その喜びは、それ以来一度も私から離れたことがありません。偽ることのない神（テトス1:2）の約束に基づいているからです。私は早くから、神の書かれたみことばが真実で信頼できるものであることがどれほど大切かを学びました。

フランスでオペレーション・モビライゼーション（OM）に参加していたとき、私は、目の見えない少年ジョエル（Joel）がイエスに信頼して喜びによって変えられるのを目の当たりにしました。私は医学を学ぶ代わりに、宣教団体TEAM（The Evangelical Alliance Mission）とともに14か月間日本へ行きました。私の牧師であったカシオカ先生は、日本の福音派に最も必要なのは新約聖書学の博士号を持つ人であり、できればケンブリッジ大学で博士号を取った人だ、と言いました。そこで私は、米国のトリニティ神学校（Trinity Evangelical Divinity School）で学んだ後、ケンブリッジで博士課程を始めました。私の博士論文は、聖書の無誤性に対するある異論を扱うものでした。それは、私が神学校での教育から答えを得られなかった唯一の異論でした。種を蒔く人のたとえの解き明かしは矛盾しているように見えます。そこでは「種はことばです」とも、「これらは蒔かれる人たちのことです」とも言われているからです。私は、この見かけ上の食い違いが、アラム語の動詞「蒔く」の誤解に起因していることを発見しました。ギリシア語では、「蒔かれる」ものは種です。アラム語では、通常、種を蒔かれるのは土地です。ですから「これらは蒔かれる人たちのことです」は、人々を、種を受け入れるさまざまな種類の土地にたとえているので

す。「蒔かれる」のこの用法は、種を蒔く人のたとえの解き明かしがアラム語からギリシア語に翻訳されたことを示しています。したがって、この解き明かしはギリシア語を話す教会によって作り出されたはずはなく、イエスにさかのぼるものであることの証拠となります。この発見は、New Testament Studies 26（1979-80）、564-568頁に発表されました。

ケンブリッジに着いて間もなく、ある講師が「新約聖書のどの箇所も、その本来の文脈において理解されるならば、女性の奉仕を制限してはいない」と主張しました。私は、テモテへの手紙第一2章12節は女性が男性を教えることを禁じていると思っていたので、思わず「それは違う！」と叫びそうになりました。その夜、私はテモテへの手紙第一をギリシア語で読み、彼が間違っていることの証拠を見つけようとしました。しかし、一か月以上にわたってこの手紙をギリシア語で繰り返し読んだ後、私は気づきました。この手紙の事実上すべての文が、最初の段落で偽教師について挙げられている問題を扱っているのです。さらに、この手紙は偽教師に惑わされた者として、女性だけを挙げています。この特別な状況の中では、パウロが女性に教える権威を奪い取ることを禁じているのは、まったく納得のいくことです。テモテへの手紙第一2章12節の文言とその歴史的な文脈は、当時エペソの教会で起こっていた危機に対する指示にぴったり合っています。

テモテへの手紙第一2章12節を、女性が男性を教えることの一般的な禁止と理解すると、聖書の残りの部分――とりわけパウロの手紙――と調和させることが非常に難しくなります。パウロは繰り返し、「女性」や「すべての人」や「だれでも」に、教えること、あるいは預言することを命じています（コリント第一11:5; 14:5, 24, 26, 31, 39、コロサイ3:16、テモテ第一3:1-2、テトス2:3、テモテ第二2:2。ヘブル3:1, 12; 5:12も参照）。パウロは、男性を教えた多くの女性を高く評価しています（ローマ16:1-12、使徒18:1-7, 26）。その中には、ユウオディアとシンティケ（ピリピ4:2）や、テモテの祖母ロイスと母ユニケ（テモテ第二1:5）がいます。彼女たちはテモテに「幼いころから」聖書を教えました（テモテ第二3:15）。この教えがいつか終わったことを示唆するものは何もありません。パウロの同労者ルカは、預言していたピリポの四人の娘たちについて書いています（使徒21:8-9）。マタイの福音書28章19-20節にあるイエスの宣教命令は、教会全体に（ルカ24:33, 47-53参照）、男性にも女性にも向けられています。「ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。」神は、霊感による聖書を女性を通しても啓示されました（出エジプト15:21、士師5:2-31、サムエル第一2:1-10; 25:24-31、箴言31章、ルカ1:25, 42-55）。これらすべてが示しています。パウロがテモテへの手紙第一2章12節を、女性が男性を教えることの一般的な禁止として意図したということ――あるいは聖霊がこの節をその意味で霊感したということ――は、非常にありそうにないことなのです。

2.1 新しい発見の四つの例

後に私は、女性の奉仕を制限していると私が考えていたほかの箇所も調べました。その結果、それらについても私が誤解していたことがわかりました。ここに四つの例を挙げます。その中には、この小冊子で後に続く要約論文が2015年に発表されて以降に私が得た新しい発見も含まれています。

1) テモテへの手紙第一2章15節は、女性が子どもを産むことによって救われると教えているのではありません。パウロは、その前の二つの節で、エバが欺かれて堕落したことを扱う創世記3章13節に言及しています。それに続くのが創世記3章15節です。「女の子孫」が蛇の頭を打ち砕くのです。パウロはテモテへの手紙第一2章15節で、堕落に対する同じ解毒剤を挙げています。「しかし、各人はその出産（têsteknogonias）によって（dia）救われます。」この救いは、その直前の堕落への言及とはっきりと対照をなしており、続く条件「もし彼らが信仰と愛と聖さにとどまるなら」にも完全に合っています。「各人」という主語だけが、単数の動詞（「救われます」）から複数（「もし彼らが……とどまるなら」）への変化を説明できます。パウロの手紙のほかのすべての箇所で、「救う」（sôzô）とその関連語は霊的な救いを指しています。コリント人への手紙第一15章2節で、パウロはまったく同じ構文（sôzôの受動態＋dia＋属格）を用いて、救いの手段を挙げています。「福音によって救われる」。さらに、パウロ以前のギリシア文献に見られるteknogoniaの三つの用例はすべて、一人の子どもの誕生を指しています。子どもを産むこと一般を指しているものは一つもありません。「その出産」には冠詞が付いています。テモテへの手紙第一では、単数の名詞の前に冠詞が付いている例が61回あります。そのうちの55の冠詞は、明らかに特定の、個別のものを指しています。明らかに一般的な意味で用いられているのは、ただ一つだけです（テモテ第一4:8）。ですから、「その出産」を特定の出産を指すものと理解するのが自然です。どの出産が救いの手段なのでしょうか。イエスの誕生だけです！

一般的な手紙の読者がこのヒントを理解できただろうかと疑問に思う人もいます。しかし、これは一般的な手紙ではありません。パウロはこの手紙を特に「テモテへ」（1:2）、つまり十分な教育を受けた自分の使者に宛てて書きました。それは、手紙全体にわたって「あなた」（二人称単数）という呼びかけの形が数多く用いられていることからも裏づけられます。テモテ第一1:3（2回）、18（3回）、19; 3:14（2回）、15; 4:6（4回）、7（3回）、11（2回）、12（2回）、13、14（3回）、15（3回）、16（7回）; 5:1（2回）、3、7、11、18、19、20、21（2回）、22（4回）、23（3回）; 6:2（2回）、11（3回）、12（4回）、13、14、17、20（2回）。テモテは説教者であり（コリント第二1:19）、パウロの使者であり（コリント第一4:17; 16:10、テサロニケ第一3:2, 6、テモテ第一・第二）、同労者であって（ローマ16:21）、パウロは自分の多くの手紙の第1節で彼を自分の書記として挙げています。テモテは、コリント人への手紙第二、ピリピ人への手紙とコロサイ人への手紙、テサロニケ人への手紙第一と第二、そしてピレモンへの手紙を書き記しました。テモテは確かに、この文脈で「出産によって救われる」がイエスを指していることを理解できたはずです。

2) 結婚における貞節を表すギリシア語の言い回しには、二つの形があります。「一人の妻の夫」（たとえばテモテ第一3:2）と「一人の夫の妻」（たとえばテモテ第一5:9）です。しかし、貞節なパートナーが男性である可能性もある場合には、ギリシア語の用法では「一人の妻の夫」という形が求められました。ティモシー・フライバーグ（Timothy Friberg）は、新約聖書の中に、女性を含まなければならない、あるいは含むことのできる文法上の男性形を7,500から8,000数えています（ほぼ一文に一つです！）。ヨハネス・クリュソストモス（Johannes Chrysostomus）はこのことを理解していました。それは、テモテへの手紙第一3章についての彼の第11説教（PG 62,545以下）に表れています。そこで彼はテモテへの手紙第一3章12節についてこう書いています。「執事は一人の妻の夫でなければならない。このことは女性の執事についても言われるべきである。」

クリュソストモスは、女性は男性に劣ると考えていましたが（NPNF1 12:151.4）、「一人の妻の夫」というギリシア語の言い回しが、男性にも女性にも同じように当てはまることを認めていました。ちょうど私たちの「一夫一婦制」という言葉と同じです。**したがって、「一人の妻の夫」という表現は、女性を監督（テモテ第一3:2）、長老（テトス1:6）、執事（テモテ第一3:12）の職から締め出すものではありません。**

3) テトスへの手紙2章3節によれば、「女性の長老」は聖所での奉仕にふさわしくふるまい、……「良いことを教える者」であるべきです。パウロの言い回しは、「女性の長老」にぴったり合っています。ですから、聖書は女性の長老に言及していない、と主張すべきではありません。「女性の長老」を表す語presbytidasは、後に「女性の長老」の任命を禁じるために用いられたのと同じ語です。[3] **パウロは、女性の長老を言い表すために、「良いことを教える者」（kalodidaskalous）という語を造りました。** テトスへの手紙2章4-5節には、女性の長老が何を教えるべきかの例が続きます。この列挙はもちろん網羅的なものではありません。しかし、これらの節のどこにも、女性の長老は若い女性しか教えてはならない、と述べたり示唆したりしているところはありません。

4) ペテロの手紙第一3章7節には主動詞がありません。しかし「同じように」は、ペテロが「従いなさい」を意味していたことを前提としています。こうして、その前にある三つの、従うようにという勧めとの並行関係が生まれます。

「主のゆえに、人が立てたすべての権威に従いなさい」（2:13）

「しもべたちよ、尊敬の心を尽くして主人に従いなさい」（2:18）

「同じように［homoiôs］、妻たちよ、自分の夫に従いなさい」（3:1）

ですから、ペテロの手紙第一3章7節はこう命じています。「同じように［homoiôs］、夫たちよ、妻に従いなさい。妻と理解をもって共に暮らし、妻を、より弱い女性の［BDAG 208、gynaikeios「女性の」。「共同の相続人」と結びつくことで、彼女が尊いものであることを示唆している］器として認め、いのちの恵みの賜物を共に受け継ぐ者として、妻に尊敬を惜しみなく注ぎなさい。そうすれば、あなたがたの祈りが妨げられません。」

長年の間、私は自分の発見を公表しませんでした。それが教会の分裂を招くのではないかと恐れたからです。妻と私が福音自由教会（Evangelical Free Church）の宣教師として日本で働いていたとき、私は主に、私が自分の発見を公表することを主が望んでおられるかどうかを、はっきり示してくださるよう願いました。この祈りから24時間以内に、三つのことが起こりました。米国福音自由教会の総裁A・T・オルソン（A. T. Olson）が、私の研究成果を公表するよう求めてきました。私たちの牧師会の議長が、教会の指導における女性について論文を書くよう求めてきました。そして、ダグラス・J・ムー（Douglas J. Moo）の論文が私の手元に届きました。[4] その70頁には、「女性が欺かれやすいことが、女性を公の教えに携わることから遠ざけている……女性が生まれつき適していない活動というものがあるのだ」と書かれていました。これらのはっきりとした祈りへの答えによって、私は論文でムーに応答する自由を得ました。[5] 数えきれないほど多くの人々が、私の出版物によって女性たちが実り豊かな奉仕へと解き放たれたことを証ししてくれました。それに加えて、世界中の、また多くのキリスト教の伝統に属する学者たちの賛同も得まし

た。これらすべてが、私にこのうえなくはっきりと確信させてくれました。神は本当に私を公表へと導かれたのだ、と。

50年にわたる研究を経た今も、私は、聖書の原典の中に女性の奉仕を制限する箇所を一つも見いだしていません。私の研究は、聖書がその教えるすべてにおいて誤りがないという私の信頼を強めてくれました。私たちの権威は、私たちの文化ではなく、聖書なのです。

2.2 男女の平等は重要なことでしょうか

多くの人々は、奴隷制に対して聖書に基づく異議を唱えませんでした。それが教会を分裂させるのではないかと恐れたからです。しかし今、教会は、奴隷制と闘わなかったことが恐ろしい過ちであったと認めています。私たちは人種間の和解のために力を尽くし、人種差別による不正を告発しています。神は女性に対しても正義を求めておられます。**神は、あらゆる性別の階層に潜んでいるえこひいきに反対しておられます。そして、この階層が歴史を通じて引き起こしてきた女性への抑圧に反対しておられます。ですから、これは決してささいな問題ではありません。伝道にとって、福音の宣教にとって、キリストの御国の前進にとって重要なのです。さらにこの問題は、私たちが愛と敬意をもって他者、とりわけ結婚においてどう接するかにも影響します。**

この問題が重要なのは、聖書がすべての人に対して権威を持つ神のことばだからです。真理は、注意深い分析という骨の折れる作業に値します。聖書の不正確な翻訳と、特定の箇所の誤解を招く解釈が、女性に対する虐待に加担してきました。その結果、とりわけ、何百万もの人々が教会に背を向けてしまいました。さらに何百万もの人々が、聖書は女性を隷属させていると誤って思い込み、聖書を憎んでいます。聖書の中で指導的な役割を担った女性の数多くの例は、神が女性に奉仕のための賜物を与え、奉仕へと導いておられることを証明しています。女性の奉仕を制限する人々は、教会を貧しくしています。彼らは福音の宣教を制限し、聖霊による女性の賜物と召しに逆らい、男女の同等の権利を表している聖書の多くの原則に反して行動しているのです。

3 聖書は男女の平等[6]を教えている

聖書は性別の問題について一貫していないのでしょうか。多くの高名な福音派の学者たちは、聖書は男女の平等と性別による役割の両方を肯定しており、その二つの間には緊張関係があると考えています。私たちは、聖書のテキストに無理を強いることなく、聖書の一貫した立場に到達することができるでしょうか。良い釈義を組織神学の祭壇にささげなければならないのでしょうか。確かに、良い釈義と良い組織神学は手を携えて進むものです。私は何十年にもわたって、祈りのうちに、性別をテーマとするテキストの見かけ上の矛盾と格闘してきました。そして、聖書のテキストそのものが私の理解を変えたのだと、正直に言うことができます。創造から新しい創造に至るまで、教会と結婚における性別についての聖書のメッセージは、一貫して男女の平等を肯定しています。

3.1 旧約聖書における女性

3.1.1 創造における女性と堕落後の女性

創世記は示しています。神は人間を、男性の指導の下にではなく、平等な性として創造されました。[7] 創世記は、男性と女性が等しく神のかたちに創造され、共に地を治める者とされていると教えています（創世記1:26-27）。彼らの平等は、神の前での霊的な立場に限られるものではなく、地を治めることにも及んでいます。神は男と女を祝福し、28節で二人ともに命じられました。「生めよ。増えよ。地に満ちよ。地を従えよ。……地の上を這うすべての生き物を支配せよ。」

創造の物語の構造は、女性の創造において頂点に達します。女性は、自分にふさわしいパートナーを求める男性の必要を満たします（2:18, 20）。テキストは、女性が男性の‘ezer kĕnegĕdôとして創造されたと述べています。文字どおりに訳せば「彼に対応する力」です。残念ながら、ここで‘ezerという語はしばしば「助け手」（Helfer）と訳されます。この語は英語でもドイツ語でも、目下の者や召使いを含意してしまいます。しかし聖書の中で‘ezerは、決して「召使い」という意味での「助け手」を表すことはなく、ほとんど常に、神をご自分の民の救い主、力、あるいは勢力として描いています。[8] 聖書ヘブル語の権威ある辞書は、‘ezerの聖書における意味として「助け、支え、力、強さ」を挙げていますが、「助け手」は挙げていません。[9] ‘ezerは三度、軍事的な保護者を描いています。[10] これらの箇所のどの文脈からも、‘ezerとしての神や女性が男性に従属していると結論づけることはできません。[11]

二つ目の語kĕnegĕdôは、kĕ（〜のように）＋negĕd（前に）＋ô（彼の）から成り、「彼の前にいるかのように」という意味です。negĕdと関連する名詞Nāgîdは、前に立つ人物を指し、「（ヤハウェによって）指導者と宣言された者」を意味します。[12] ですから、‘ezerと同じくkĕnegĕdôも、目下の者というよりは、むしろ目上の者か対等な者を指しています。創世記2章の‘ezer kĕnegĕdôという表現のどこにも、神が女性を男性の従属的な助け手として創造されたことを示すものはありません。それどころか、この表現は彼女の強さを際立たせています。彼女は男性の同等の権利を持つパートナーであり、彼を孤独から救い出します。彼女は彼の対となる存在です。すなわち、地を治めるにあたって彼を補う、彼の伴侶であり友です。彼女は彼を完全なものとし、こうして二人は共に実を結び、地を守ることができるのです。

ほかの点でも、創世記の創造の記事は、男性に女性より高い地位や大きな権威をどこにも認めていません。[13] それどころか、一貫して二人の平等を強調しています。神は女性を男性の脇から造り、男性は悟ります。「これこそ、ついに私の骨からの骨、私の肉からの肉」（2:23）。二人は同じ実質を持っているからです（2:21-23）。「父と母」は、序列の違いなく並べて挙げられています（2:24）。結婚において、二人は「結ばれ」、「一体」となります（2:24）。二人とも裸であって、恥ずかしいと思いません。道徳的な無垢を共有しているのです（2:25）。二人は共に誘惑を受け、神の命令に背きます（3:6）。二人とも自分たちが裸であることを知り、覆いを縫い合わせます（3:7）。二人とも神から身を隠します（3:8）。これは、二人とも神に従わなかったことを恥じていることを示しています。二人とも責任を転嫁します（3:12-13）。神は二人に直接語りかけ、それぞれの罪の具体的な結果を告げられます（3:9-13, 16-19）。二人とも自分自身の行いに責任を負っ

ています。ですから創世記2-3章は、男女の平等を描いているのであって、男性に女性に対する権威を与える「創造の秩序」[14]を描いているのではありません。

男性が女性を支配することは、神の本来の計画には含まれていません。男性の支配が最初に言及されるのは創世記3章16節であり、そこでそれは堕落の直接の結果として示されています。「彼はあなたを支配することになる。」男性の階層を支持する著名な人々でさえ、これが「あるべきことについての規定ではない」ことを認めています。[15] 堕落のほかのあらゆる結果と同じく、それは悪い方向への変化です。男性は創造のときからすでにかしらであるという自分たちの理論とこれを調和させるために、階層の支持者たちはこう主張します。創世記3章16節で問題になっているのは、愛のない支配が始まったことであって、女性に対する男性の支配一般ではない、と。[16] しかしテキストは、愛のない男性の支配だけが堕落の結果だとは言っていません。男性の支配そのものが堕落の結果だと言っているのです。創世記3章16節には、「支配する」を表す、群を抜いて最もよく使われる語が用いられています。この語は、それ自体では悪い支配を思わせるものではありません。この語は神の支配にさえ用いられています。神の支配は確かに悪い支配ではありません！ 聖書ヘブル語の二つの大きな辞書は、旧約聖書におけるこの語のすべての用例を分析していますが、否定的な意味を一つも挙げていません。[17] この語は悪い支配を含意しているのではなく、単に「支配」を意味しているのです。女性に対する男性の支配そのものが堕落の結果なのですから、堕落の前に男性が女性を支配していたはずはありません。最良の状況のもとでさえ、女性に対する男性の支配は、ある実際的な結果をもたらします。神が創造のときに男性と同等に女性に与えられた権威が、女性から取り去られてしまうのです。さらに、多くの男性が、その堕落した性質のために、自分の権威ある立場を女性を虐待するために用いてきました。神が、蛇の頭を打ち砕くと約束された女の子孫であるキリスト（創世記3:15）は、堕落に打ち勝たれました。

ですから私たちは、堕落の悲劇的な結果を助長するのではなく、それに抵抗すべきです。そこには、女性に対する男性の支配も含まれます。

3.1.2 旧約聖書のほかの箇所における女性

旧約聖書は、男性を指導した多くの女性をたたえています。その中には妻であり母である女性たちもいます。旧約聖書は、神の祝福のもとで指導した女性たちを示しています。彼女たちの性別がそれにふさわしくなかったとは、どこにも示唆されていません。女預言者ミリアムは、イスラエルを導くために神から遣わされています（ミカ6:4。出エジプト15:20-21参照）。デボラは、「主が起こされ」、「イスラエルを敵の手から救った」さばきつかさたちの一人であり（士師2:16, 18; 4:10, 14, 24; 5:1-31）、女預言者であり、全イスラエルの最高指導者でした（4:4-5）。妻であり母であった彼女は（5:7）、イスラエルの軍司令官バラクに「行け！」と命じる権限を持っており（4:6, 14）、彼は出て行きました。二人は共有された権威のもとでよく協力しました。彼は軍の司令官として、彼女は最高司令官としてです。王妃エステルは、ハマンの家と75,000人のユダヤ人の敵の滅亡をもたらすだけの影響力を持っていました（エステル7:1-10; 9:1-32）。モルデカイと共に、彼女は「全権をもって書き記した……エステルの命令が、これらの規定を確定した」のです（9:29-32）。聖書は、シェバの女王（列王第一10:1-13、歴代第二9:1-12）とカルデアの王妃（ダニエル5:10-12）をたたえています。「王妃（女王）」を表すヘブル語は、単に「王」に女性形の語

尾を付けたものです。「王」の語根から出た称号を持つ人物の中で、聖書の中でもっぱら称賛され、一度も批判されていないのは三人だけです。それがこの三人の女性です。ユダの王たちの記録では、常に王母、すなわち王たちの母親が言及されるか、名前を挙げられています（エレミヤ13:18; 29:2、列王第二24:15参照）。その中には、王座に着いていたバテ・シェバ（列王第一2:17-19）、マアカ（列王第一15:2, 10, 13）、ネフシュタ（列王第二24:8）がいます。

失われたと思われていた律法の書が見つかったとき、祭司たちはそれについて女預言者フルダに伺いを立て、彼女の霊的な指導に服しました。王、長老たち、預言者たち、そして民を含むイスラエルの指導者たちは、彼女のことばを神から啓示されたものとして受け入れました（列王第二22:14-23:3、歴代第二34:22-32）。イスラエルの男性の指導者たちは、一人の女性が語った神のことばに従ったのです。それが、おそらくイスラエルの歴史上最大のリバイバルを引き起こしました（列王第二22:14-23:25、歴代第二34:29-35:19）。

旧約聖書のどのテキストも、神が特別な事情があったからにすぎないとして、女性に男性に対するそのような政治的あるいは宗教的な権威を許されたとは言っていません。また、これらの例が聖書の原則の例外として描かれているところもありません。確かに、イスラエルの二人の女性支配者は悪い者でした。アタルヤ（列王第二11:1-3、歴代第二22:10-12）とイゼベル（列王第一18:4）です。しかし、イスラエルの王たちの大半もそうでした。聖書は、彼女たちも、ほかのイスラエルの女性指導者も、男性に対する権威は女性にふさわしくないという理由で批判してはいません。それどころか、旧約聖書は、宗教的・政治的な指導的立場にある女性を当たり前のこととして描いています。

旧約聖書において、女性が一度も就かなかった重要な社会的・宗教的指導職がただ一つあります。祭司職です。その理由は明らかです。いくつかの異教の祭儀では、女祭司が売春や祭儀的な性の儀式と結びついていました。申命記23章18節はそれを禁じています。神はご自分の民に対して、周囲の諸民族の不道徳な慣習に従っているかのような外見さえ与えることを、繰り返し禁じられました。[18] 女祭司がいれば、まさにそのような外見を与えてしまったことでしょう。しかし旧約聖書の理想は、イスラエルの民全体が「祭司の王国、聖なる国民」となることでした（出エジプト19:6）。イザヤ書61章6節は、神の民全体が祭司となる時を予告しています。「あなたがたは主の祭司と呼ばれ、私たちの神に仕える者と言われる。」神は、新約の教会において、ご自分の民全体の祭司職を実現されました（ペテロ第一2:9）。

旧約聖書の預言者たちは、神が女性により大きな預言的役割を考えておられることを告げました。モーセはこう書きました。「主の民がみな預言者となり、主が彼らの上にご自分の霊を与えられるとよいのに」（民数11:29）。ヨエルは神のご意図を告げ知らせました。「わたしは、すべての人にわたしの霊を注ぐ。あなたがたの息子や娘は預言する……その日、わたしは、男奴隷にも女奴隷にも、わたしの霊を注ぐ」（ヨエル3:1-2）。これは五旬節に成就した約束です（使徒2:14-21）。

神は、あらゆる預言的な務めの中でも最大の務めのためにさえ、女性を用いられました。彼女たちを通して、霊感による聖書の重要な部分を語られたのです。その中には、ミリアムの歌（出エジプト15:21）とデボラの歌（士師5:2-31）、そしてハンナの祈り（サムエル第一2:1-10）がありま

す。新約聖書においても、神はこのようにして女性を通して語られました。エリサベツの歌（ルカ1:25, 42-45）と、聖書についての最初のキリスト教的解釈であるマリアの賛歌（マグニフィカト）です（ルカ1:46-55）。ですから神は、女性が男性を指導することを決して排除されませんでした。それどころか、女性を世俗の指導の務めにも霊的な指導の務めにも召されたのです。

3.2 イエスと女性たち

イエスは、そのすべてのことばと行いによって私たちに模範を示されました。イエスは女性を男性と平等な者として扱い、決して従属的な者として、あるいは役割を制限された者として扱われませんでした（マタイ12:49-50; 15:38; 25:31-46、マルコ3:34-35、ルカ8:21; 11:27-28）。イエスが女性を同等の権利を持つ者として扱われたことは、当時の法的、社会的、宗教的な慣習に反するものでした。姦淫や離婚のように女性の権利が制限されていた法的な事柄において、イエスは男性と女性を同じように扱われました。女性を男性より知性も道徳性も劣るとみなす社会の中で、イエスは女性の知性と霊的な能力を尊重されました。そのことは、イエスがまず女性たちに、たとえばサマリアの女（ヨハネ4:10-26）やマルタ（ヨハネ11:25-26）に教えられた偉大な霊的真理に表れています。

女性が宗教教育を受けることがよしとされなかった文化の中で、イエスは女性たちが自分の弟子となるよう励まされました。たとえば、マリアが「主の足もとに座って、主のことばに聞き入っていた」とき――それは弟子の姿勢であり立場です――、イエスは彼女を力づけられました。「マリアはその良いほうを選びました。それが彼女から取り上げられることはありません」（ルカ10:38-42）。[19] イエスの時代の弟子たちは、ラビの教えを伝えるために訓練を受け、通常は自分自身も教師になったということについては、広く意見が一致しています。しかし、ラビの弟子は常に男性でした。イエスは男性の弟子にも女性の弟子にも教えられました。それは、女性も男性も信仰の教師にしようというイエスのご意図を示しています。

確かにイエスは、もともとの十二使徒の集団には男性だけを選ばれました。彼らは初代教会において非常に尊敬される指導的役割を担っていました。それによってイエスは、女性を教会の指導から締め出されたのでしょうか。いいえ。男性を使徒に選んだというだけでは、論理的に言って、自由人のユダヤ人を使徒に選んだことが異邦人や奴隷を教会の指導から締め出さないのと同じく、女性を教会の指導から締め出すことにはなりません。いずれにせよ、初代教会で最も影響力のあった二人の指導者は、イエスの兄弟ヤコブ（使徒15:13、ガラテヤ1:19）[20]とパウロでした。二人とも十二人には属していませんでしたが、使徒でした。そして一人の女性も使徒でした。ユニアです。[21] 十二人の枠の外にいたほかの使徒たちも教会の指導において重要な立場にあったのに、なぜ十二人だけが教会の指導についての私たちの唯一の基準でなければならないのでしょうか。

それでは、なぜイエスは、もともとの十二使徒に男性だけを選び、女性を選ばれなかったのでしょうか。新約聖書はその理由を挙げていません。しかしおそらくイエスは、二つの理由で男性を選ばれたのでしょう。つまずきを与えないためと、象徴的な対応関係をつくるためです。もしイエスが、とりわけ荒野やゲツセマネの園のような場所での夜の集まりに女性を連れて行かれたなら、道徳的な疑いを招いたことでしょう。しかもイエスに対してだけでなく、教会がその誠実さ

に頼ることになる十二人に対してもです。さらに、イエスが十二人の自由人のユダヤ人男性を任命されたことは、イスラエルの十二人の息子たち、あるいは十二部族に対応しており、「新しい、あるいは刷新されたイスラエル」としての教会の象徴性を強めるものでした。加えて、イエスが女性の弟子たちをも選ばれたこと（上記参照）は、十二人の男性の使徒を選ぶことによって、女性を教会の指導から締め出そうとはされなかったことを示しています。

イエスはまた、女性が男性に福音を宣べ伝えることを妨げられませんでした。最初のキリスト教の宣教者は、一人のサマリア人の女性でした。「さて、その町の多くのサマリア人が、その女の証しのことばによってイエスを信じた」（ヨハネ4:39。4:28-42参照）。復活されたキリストが最初に会いに行かれた人は、マグダラのマリアでした。キリストは彼女に、ご自分の復活と、父なる神のもとへの間近に迫った昇天についての福音を告げ知らせるよう命じられました（ヨハネ20:14-18）。「使徒」とは単に「遣わされた者」という意味ですから、キリストは彼女を使徒たちへの使徒に任命された、と言うのがふさわしいでしょう。キリストは指導を、へりくだって仕える指導として新たに定義されました（たとえばヨハネ13:3-17）。キリストに仕える中でのそのような指導は、少なくとも男性にふさわしいのと同じくらい、女性にもふさわしいものです。

3.3 パウロと女性たち――平等の擁護者

パウロは三つの仕方で男女の平等を肯定しています。彼は、男性と肩を並べて奉仕に携わる同労者として女性たちの名を挙げています。彼は、そこから男女の平等が導かれる多くの神学的真理を主張しています。そして彼は、男女の平等をはっきりと強調しています。

3.3.1 奉仕に携わる女性たちについてのパウロの承認

ローマ人への手紙16章1-16節で、パウロは多くの人々に名前を挙げてあいさつを送っています。そのうち10人を、彼はキリスト教の奉仕における同労者として言い表しています。その10人のうち7人が女性です。「ケンクレアにある教会の女性執事」（16:1）であり、「私自身を含む多くの人々の長[22]」（16:2）であるフィベ。「使徒たちの間で際立っている」（16:7）[23]ユニア。「キリスト・イエスにある私の同労者」（16:3。ピリピ4:3参照）プリスカ。そして「主にあって熱心に」働いたマリア、トリファイナ、トリフォサ、ペルシスです（16:6, 12）。コリント人への手紙第一16章16節で、パウロは信者たちに「すべての同労者に従う」よう求めています。テサロニケ人への手紙第一5章12節では、「あなたがたの間で労苦している人々」が「主にあってあなたがたを指導し、訓戒している人々」と言い表されています。いくら強調しても足りないのは、パウロがこれらの女性たちを単に信者として列挙しているのではなく、奉仕における指導者として挙げているということです。パウロはこの段落で多くの信者にあいさつを送っていますが、奉仕における指導者として言い表しているのは10人だけで、そのうち7人が女性なのです。3人の男性は、アキラ、アンドロニコ、ウルバノです。初めの二人は妻と一緒に挙げられており、そのことは夫婦が共有していた権威を際立たせています。**パウロが公の共同体の指導者の中にこれほど高い割合の女性を挙げていることは、古代ギリシア文学の全歴史の中で類例がありません。それは、初代教会において女性たちが、当時の文化にとって異例と言えるほどの程度で指導していたことを示しています。**

3.3.2 パウロの神学から男女の平等が導かれる

パウロは、男性と女性が等しく「神のかたちに創造され」ており、等しく「キリストにある」者であることを確認しています。二人には地を治めることが委ねられ、二人とも創造の命令と神の祝福を受けました。彼の神学の多くの原則が、二人の平等を必然的に含んでいます。仕える指導、教会と結婚における「互いに従うこと」、キリストのからだの一致、全信徒祭司性、すべての人への御霊の賜物、キリストにある自由、すでに始まっている終わりの時、新しい創造、そしてキリストにあっては「男と女の区別はない」という言明です。[24]

3.3.3 男女の平等についてのパウロの明確な肯定

二つの箇所（ガラテヤ3:28とコリント第一11:11）で、パウロは、女性と男性が教会生活において同等の権利を持っていることをはっきりと支持しています。

ガラテヤ人への手紙2章11節-3章28節で、彼は強調しています。教会の中である社会集団が――女性という集団も含めて――不平等に扱われるなら、それは福音に反する、と。彼はユダヤ人キリスト者たちを、名指しで使徒ペテロも含めて、非難しています。彼らは異邦人キリスト者を対等な者として扱わず、彼らと一緒に食事をすることさえ拒んだのです。パウロはこう論じます。キリスト者は、贖われた者としてのアイデンティティをただキリストのうちにのみ持っている。だから、教会の中で出自や財産や性別によって地位や特権を割り振ることは、福音に反する、と。「ユダヤ人とギリシア人の区別はなく、奴隷と自由人の区別もなく、男と女の区別もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。」これらはすべて社会的な区分であり、「キリスト・イエスにあって」とは教会のことを指しています。ですから、ガラテヤ人への手紙3章28節は、最も明白な意味で、教会における社会的な関係を指しているのです。ペテロ自身も、後に、信者をこのように不平等に扱ったことを悔い改め、考えを改めることの模範となりました。ペテロの手紙第二3章15-16節で、彼は「私たちの愛する兄弟パウロ」について語り、「彼のすべての手紙」の知恵を「聖書」として認めています。

この段落はだれが救われうるかということだけを扱っていて、教会生活には影響しない、と言う人々もいます。しかし彼らは、この段落が救いについて語っていることを誤解しており、歴史的・文化的な文脈と、その文言から導かれる帰結を無視しています。[25] **この段落は、救いを教会における社会生活と切り離せない形で結びつけているのです。** パウロのすべての著作においてそうであるように、キリストにある贖いは、キリストのからだである教会における生活から切り離すことができません。文化的な文脈も重要です。ガラテヤ人への手紙3章28節は、ユダヤ人の日々の祈りが伝えていた考え方を退けています。その祈りの中で、祈る者は、自分が異邦人や奴隷や女に生まれなかったことを神に感謝しました。これらの集団には律法を学ぶ特権がなかったからです。パウロがこれらの区別を退けるとき、そこから導かれるのは正反対のことです。これらの集団はみな、教会の実際の生活において同等なのです。みなキリストにあって一つだからです。

ガラテヤ人への手紙3章28節とよく似た並行箇所が、コリント人への手紙第一11章11節です。「しかし、主にあっては、女は男から切り離されて[26]おらず、男も女から切り離されてはいません。」パウロはこれを、次のことを確認している文脈の中で語っています。すなわち、女性も男性と同じように、教会の公の集会における最も重要な活動――祈り（礼拝の垂直方向の次元）と預言

（礼拝の水平方向の次元）――を導くことができる、ということです。条件はただ、その際に結婚もキリスト教倫理も損なわないことだけです。[27] したがって、男性と女性は「主にあって」切り離されていないという言明は、少なくとも教会におけるこれらの指導的な活動に当てはまります。この節の最初の語「しかし」は、ギリシア語では、続く文がこのテキストの最も重要な点であることを示唆しています。確かにパウロは、男性と女性に異なる髪型を求めています（11:14-15）。その髪型が不道徳のしるしと受け取られないためです。しかし、公の礼拝についての彼の最も重要な点は別のところにあります。彼は、キリストにあって性別によって分け隔てすることを、はっきりと退けているのです。ですから彼は、男性も女性も祈りと預言によって礼拝を導くことを歓迎しているのです。

3.3.4 夫と妻の平等についてのパウロの肯定

結婚についての最も詳しい論述であるコリント人への手紙第一7章で、パウロは12の異なる問題について、夫と妻にまったく同じ条件、可能性、権利、義務を挙げています。これらのどの点においても、彼は男性と女性に同等の権利を持つ者として語りかけています。パウロは、この平等を強調するために、左右対称に釣り合いのとれた言い回しを繰り返し用いています。次の12のテーマがそれをはっきりと示しています。パウロは、夫と妻が互いに属していることを強調しています（2節）。二人は結婚における互いの権利を持ち（3節）、互いのからだに対して互いに権威を持ち（4節）、互いに性的な義務を負っています（5節）。二人とも、別れたり離婚したりしないよう求められています（10-13節）。二人とも、相手と自分たちの子どもを聖なるものとしています（14節）。二人とも、相手が去って行くなら自由です（15節）。二人とも、相手を救いに導く可能性のある影響力を持っています（16節）。二人とも結婚する自由があります（28節）。二人とも、独身者としてキリストに集中することもできれば（32節と34節b）、既婚者として相手を喜ばせることに心を向けることもできます（33-34節aと34節c）。パウロは、「夫は自分のからだについて権利を持っておらず、それを持っているのは妻です」（7:4）とさえ書いています。リチャード・ヘイズ（Richard Hays）は、これがどれほど革命的なことであったかを的確に指摘しています。「パウロは、それまでのあらゆる型を打ち破る結婚観を示している。それは、パートナーが互いに従い合うことによって結び合わされている関係である。」[28]

エペソ人への手紙5章21-22節でも同様です。妻が従うことは、はっきりと、互いに従うことの一部です。二人とも、自発的に、愛をもって互いに従い合うのです。[29] パウロは妻たちにも夫たちにも、互いに相手を優先し、互いに配慮し合うよう呼びかけています。キリストは、妻たちにとっても夫たちにとっても、すべての信者の模範です（5:2）。パウロがキリストを「かしら（頭）」と呼ぶとき何を意味しているかを、彼は23節で示しています。彼は「かしら」を、力を込めて「救い主」と同一視しているのです。「キリストは教会のかしらであり、からだの救い主です。」

キリストは「救い主」として何をなさるのでしょうか。パウロは説明しています。キリストは教会のために「ご自分を献げ」（5:25）、教会を「養い育て」られます（5:29）。このことは、パウロが「かしら」を、ギリシア語で一般的な「源」という意味で用いていることを示しています。彼はここで、教会にとっての愛と養いの源としてのキリストを指しているのです。[30] パウロは夫たちに、妻の「かしら」として、「かしら」であるキリストの模範に倣うよう呼びかけています。すな

わち、妻を愛し、養い、大切にすべきなのです（5:25-29）。この大切にし、養う愛こそが、妻が従うことの動機となります。権威の階層がその動機なのではありません（5:23）。

聖書は、女性が家庭で指導することを支持しています。パウロは、子どもたちとの関係において夫と妻を同等に扱い（エペソ6:1-2、コロサイ3:20）、妻たちに「家を治める」よう求めています（文字どおりには「家の女主人であること」、ギリシア語oikodespoteo、テモテ第一5:14）。これが家庭における指導でないとしたら、何だというのでしょうか。

3.4 パウロと女性たち――家父長制の擁護者？

パウロが性別の平等をさまざまな仕方で肯定しているにもかかわらず、彼は教会における男性の支配を擁護しているという考えが根強く残っています。それはいったいなぜでしょうか。何よりも、ごく少数の箇所についての広く知られた解釈のためです。テモテへの手紙第一2章12節（「私は、女が教えたり男を支配したりすることを許しません」）、テモテへの手紙第一3章とテトスへの手紙1章（男性の監督だけが規定されている）、そしてコリント人への手紙第一14章34-35節（「女は教会では黙っていなさい」）です。以下の分析は、これらの節についての一般的な解釈の誤りを明らかにし、パウロが一貫して性別の平等を擁護していることを示します。

3.4.1 テモテへの手紙第一2章12節

テモテへの手紙第一2章12節は、女性が教えること、あるいは男性に対して権威を行使することを禁じているのでしょうか。いいえ、実はそうではありません。パウロはテモテへの手紙第一2章11-12節でこう書いています。「女は、よく従う心をもって学びなさい。私は、女が教えること、そして［それと結びついて］男に対して権威を僭取することを許しません。」[31] 文法的には、この禁止は当時存在していた状況に関わるものです。テキストのどこにも、それが一般的に適用されるべきだとは書かれていません。「私は許しません」という言い回しの動詞は、普遍的な禁止よりも、むしろ現在有効な禁止を示しています。とりわけこの文法形――一人称・現在・直説法――においてはそうです。

辞書BDAG[32]（150頁）は、この鍵となる動詞の意味を「独立した権威の立場を僭取する」と定めています。新国際訳（New International Version、2011年改訂版）では、正しく「**権威を僭取する**」と訳されています。この動詞が「権威を僭取する」という意味で用いられている用例では、常に、資格のない者が権威を不当に要求することが問題になっています。この節では、「権威を行使する」を表す新約聖書の標準的な語は用いられていません。階層の支持者たちの最も重要な本でさえ、パウロの時代についてのこの鍵となる語の研究の中で、可能な意味として「権威を行使する」も「権威を持つ」も挙げておらず、挙げているのは「権威を僭取する」なのです。[33] したがって、パウロは女性が男性に対して権威を行使することを禁じているのではありません。むしろ彼は、女性が男性に対して不当に権威を僭取することを禁じているのです。そのきっかけは、エペソにおける偽りの教えによる継続中の危機です。

ですからパウロは、二つのこと――女性が教えることと、女性が男性に対して権威を僭取すること――を禁じているのではありません。彼が禁じているのは一つのことだけです。すなわち、女性が男性を教える権威を僭取することです。この節では、ギリシア語のoudeが、「教える」と「権

威を僭取する」という二つの要素を結びつけて、一つの考えを表しています。これは、パウロのこの接続詞の用法に典型的なものです。[34] では、なぜパウロはこの箇所で、女性が男性を教える権威を僭取することを禁じているのでしょうか。彼は二つの理由を挙げています。

第一に、女性が教会からの委任なしに男性を教える権威を僭取したとすれば、それは男性に対して敬意を欠くことでした。しかし女性は男性を尊重すべきでした。男性は女性がそこから出た源だからです（2:13。コリント第一11:8, 11-12参照）。

第二に、何人かの女性たちが偽教師たちに惑わされ、サタンに従うようになっていました（2:14。5:13-15参照）。パウロはすでに、偽教師たちに不当に教えることを禁じていました（1:3）。ここで彼は、同じように女性たちを制限しているのです。彼女たちは、**偽教師たちが惑わしたとパウロが言っている唯一の集団なのです。**

テモテへの手紙第一2章12節でパウロは、プリスキラ（テモテ第二4:19によれば彼女はエペソにいました）のようなエペソの女性たちが、正式に委ねられた、あるいは認められた権威を担うことを禁じては**いません。**何しろ使徒の働きは、彼女がアポロに「神の道をもっと正確に」説明したことを、称賛をもって伝えているのです（使徒18:26）。ルカとパウロは、ギリシアの慣習に従って、夫の名を先にしてこの夫婦を紹介しています。アキラとプリスキラです（使徒18:2、コリント第一16:19）。しかし、二人の活発な奉仕についてのどの段落でも、彼らは――ギリシアの慣習に反して――プリスキラを先に挙げています（使徒18:18, 26、ローマ16:3）。このことから、彼女が二人の共同の奉仕において重要な役割、いやむしろ主導的な役割さえ果たしていたことは、ほぼ確実です。ですから、パウロが同労者を挙げた二つの最も長い一覧（テモテ第二4:19-21とローマ16:1-16）で、最初にプリスカにあいさつを送っているのも驚くには当たりません。その際、彼は彼女を、彼がいつも用いている、より敬意のこもった名前の形で呼んでいます。フィベの場合も同様です。彼女はパウロの使者としてローマ人への手紙を届けました（ローマ16:1-2）。ですから当然、彼女はこの手紙についてのローマのキリスト者たちの質問にも答えました。こうして彼女はこの手紙の最初の解説者となり、その際、成人男性をも教えたのです。**これらすべてが示しています。テモテへの手紙第一2章12節は、認められた権威を持っていたプリスキラやフィベのような女性たちが男性を教えることを、決して禁じることはできません。この節が禁じているのは、認められた権威を持たない女性が、男性を教える権威を僭取することだけなのです。**

3.4.2 監督の要件――テモテへの手紙第一3章とテトスへの手紙1章

パウロは、すべての監督が男性でなければならないと規定しているのでしょうか。その反対です。パウロはすべての信者に、監督になることを目指すよう励ましています。「このことばは真実です。だれでも監督の職に就きたいと願うなら、それは立派な働きを求めることです」（テモテ第一3:1）。**ギリシア語で「だれでも」は性別に中立な語です。つまり、扉は男性にも女性にも同じように開かれているのです。** パウロが、女性に禁じられている職を目指すよう女性を励ますでしょうか。パウロは、「だれでも」が一貫して主語であり続けることをはっきりさせています。彼は5節で「だれでも」を繰り返していますし、テトスへの手紙1章6節にある監督の要件の並行する一覧でも、「だれでも」が主語です。**ほとんどの翻訳の訳し方とは異なり、テモテへの手紙第一3章1-**

13節とテトスへの手紙1章5-9節にある教会指導者の要件のギリシア語本文には、男性の代名詞が一つもありません。

では、テモテへの手紙第一3章2節、12節とテトスへの手紙1章6節によれば、監督は「一人の妻の夫」であるべきだ、という点はどうでしょうか。ギリシア語では、文字どおりには「一人の女の男」です。このテキストには、単に「男」とあるのではなく、「一人の女の男」とあるのです。この表現全体を一つの慣用句として理解しなければなりません。ある人々は、「男」という一語だけを切り出し、恣意的に文脈から引き離すことに固執します。そしてそこから新しい要件を導き出します。すべての監督は「男」でなければならない、というのです。それは、「ひき逃げ」が犯罪なのだから「逃げ」も犯罪に違いない、と主張するのと同じくらいばかげています。階層の支持者も含めて大多数の学者は、「一人の妻の夫」を、一夫多妻の者や性的に不貞な男性が監督の務めから除外されるという意味に理解しています。[35]

それでもなお、この箇所はそれに加えて女性をも除外している、と主張する人々がいます。しかし、この慣用句に二重の意味――一方では一夫多妻の者の除外、他方では監督は男性でなければならないという一般的な要求――を読み込んではなりません。それは正当化できません。同じ論理を用いれば、複数の語から成るパウロのほかの監督の要件のほとんどが、ばかげたものになってしまいます。すべての監督は、奴隷のいる「自分の家」を持ち、「信じる」ことができ、「威厳をもって」従うことができる年齢に達した複数の「子ども」を持っていなければならないのでしょうか。**テモテへの手紙第一3章11節で女性執事の資格が挙げられているのですから、3章12節の執事の要件にある同じ「一人の妻の夫」という表現が、女性を除外することはありえません。** ですから、「一人の妻の夫」に、監督は男性でなければならないという要件を読み込むのは、恣意的で正当化できないことなのです。[36]

ギリシア語では、男性と女性から成る集団を指す場合に、文法上の男性形を用いるのがごく普通のことです。[37] 家父長制を支持するある優れた牧師であり教授である人は、こう指摘しています。聖書全体を通して、男性に向けられた禁止は、通常は女性にも当てはまる、と。彼はこう説明しています。「広く認められているように……男性的な言い回しを用いている規範は、一般に、両方の性を含むものと解釈されるべきである――それに反する事情がないかぎり。」[38] マルコの福音書10章12節での申命記24章についてのイエスの解釈が、このことを裏づけています。「一人の妻の夫」に表されている一夫一婦の原則は、男性にも女性にも同じように当てはまります。ちょうど「あなたの隣人の妻を欲してはならない」（出エジプト20:17）が、隣人の配偶者を欲する男性にも女性にも同じように当てはまるのと同じです。ですから、「一人の妻の夫」の最も正確で最も文字どおりの訳は「**一夫一婦の**」です。この訳は、ギリシア語の男性形が通常は両方の性を含むということを最もよく表しています。そして、12節におけるこの慣用句の自然な意味をとらえています。

3.4.3 コリント人への手紙第一14章34-35節

ですから、テモテへの手紙第一2章は、すべての女性に、教えることや男性に対して権威を行使することを禁じているのではなく、テモテへの手紙第一3章とテトスへの手紙1章は、女性が長老になることを禁じているのではありません。しかし、コリント人への手紙第一14章34-35節は、女性

に教会で黙っているよう命じているのではないでしょうか。そのとおりです。実際、これは聖書全体の中で、女性は黙っているべきだという唯一の命令です。これらの節のはっきりとした言明は、三度繰り返されています――最大限の強調をもってです。「女は教会では黙っていなさい。女には語ることが許されていません……女が教会で語るのは恥ずべきことです。」35節は、尊敬されている女性、すなわち妻に対して、女性が教会で語ることのできる最も正当な形――何かを学びたいので質問をすること――さえ禁じています。ですから明らかです。この禁止は、教会の公の集会におけるすべての女性のあらゆる発言に当てはまるのです。それは限定的な制限にすぎないものではありません。これは、ユダヤ人、ギリシア人、ローマ人の間に広まっていた、古代世界の一般的な考え方に合致していました。[39] しかし、パウロがこの命令を下したのだとしたら、どうして彼が一貫して性別の平等を擁護する者でありえるでしょうか。そうだとすれば、パウロは――そして聖書そのものも――一貫性がなく、矛盾していることにならないでしょうか。

これらの節は、何世紀にもわたって、すでに初期の教父たちの時代から、学者たちを悩ませてきました。というのも、これらの節は、「すべての人」が教え、預言してよいという同じ章の言明（5節、24節、26節、31節。39節も参照）にはっきりと矛盾しているからです。これらの節はまた、パウロが女性が預言することを認めている11章5-6節にも矛盾しています。パウロがほかの箇所でも性別の平等を擁護していることは言うまでもありません。これらの節が謎めいているもう一つの理由は、「律法」（14:34）という語の用い方が例外的だからです。パウロがほかの箇所で「律法」を持ち出す場合、彼は常に旧約聖書を引用しています――しかしここではそうしていません。**34節の主張とは異なり、旧約聖書の律法は、どこにおいても、礼拝の集会で女性が従うよう命じてはいません。まして黙っているよう命じてなどいません。それどころか、律法は何度も、女性が神のことばを公に告げ知らせるよう励ましているのです。** たとえば詩篇68篇12節（ヘブル語本文の節番号による）には、こうあります。「主はみことばを告げられる。それを告げ知らせる女たちは大きな群れ。」コリント人への手紙第一14章34-35節は、そのすぐ前後の文脈においても、ほかの箇所においても、聖書の教えに矛盾しているので、女性が教会で語ることを無条件に禁じるこの命令は、二千年近くにわたって読者を当惑させてきたのです。

多くの学者は、コリント人への手紙第一14章34-35節をパウロの命令だと考えています。パウロ（と聖書）を矛盾のないものにするために、彼らは、三重の沈黙の要求を限定しようとする数多くの解釈を提案してきました。そのどれもが、テキストの明らかな意味に反しています。彼らは、禁じられている発言を、特定の種類の発言に限定しようとします。たとえば、預言を吟味すること、礼拝を妨げるおしゃべり、異言、教えること、あるいは預言です。これらの狭い解釈は、テキストの中で何の限定もなしに用いられている「黙る」と「語る」という語の広い意味に合いません。また、35節に挙げられている禁じられた発言の例、すなわち何かを学びたいので質問をする妻たちにも合いません。35節がはっきりと禁じている、まさにこの種の発言を、狭い解釈は許してしまうのです！ したがって、「語る」の意味を、預言を吟味すること、礼拝を妨げるおしゃべり、異言、教えること、あるいは預言といったことに限定してはなりません。**さらに、禁じられた発言を限定しようとするあらゆる試みは、この段落にある三重の（つまり最大限の）無条件の沈黙の要求に反しています。**

ですから、禁じられた発言を限定しようとする試みは、すべて失敗に終わります。それでは、34-35節を、パウロが同じ章と11章で女性が預言してよいことを何度も確認していること、そしてほかの箇所でも性別の平等を擁護していることと、どのように調和させることができるでしょうか。最良の答えは、これらの節がもともとは33節の後という現在の位置に属していなかった、という発見から得られます。そのことは、最古の写本から明らかになります。「西方型」本文のすべてのギリシア語写本では、34-35節は40節の後に置かれています。[40] そのほかの写本では、33節の後に置かれています。写字生がこれらの節を33節の後から40節の後へ、あるいはその逆へ移すことは、まったく異例で、通常ありえないことだったでしょう。

パウロの手紙のどの写本においても、これに匹敵する長さの段落が、はっきりした理由もなく、これほど遠くへ移された例は一つもありません。それに対して、よく行われていたのは次のことです。写字生が、書き写す際にうっかり一語あるいは一文を書き落としたことに気づくと、その本文を余白に書き足しました。たとえばヴァティカン写本（Codex Vaticanus）には、マタイの福音書の中に、古いアンシャル体で本文が余白に書かれている箇所が20あります。同じくよく行われていたのが、第二の段階です。新約聖書の写本を書き写す者は、余白に見いだした本文を、自分が最もふさわしいと考える場所で本文の中に組み入れました。今日でも、修正の入った手紙を打ち直す秘書が、余白の書き込みを手紙の本文に移すのと同じです。この慣習は、ネストレ＝アーラント第28版が裏づけています。ヴァティカン写本のこれら20の余白の本文のうち17が、現存する事実上すべてのマタイの福音書の写本において本文の中に入っているのです。ですから、いわゆる「転写上の蓋然性」――つまり、書き写す者が何をした可能性が最も高いかという問い――は、次のことを支持しています。だれかが、女性は黙っているべきだという命令を、最初にある写本の余白に書きました。後の写字生たちが、それを33節の後か40節の後のどちらかで本文に挿入したのです。[41] 結局のところ、ありふれたことのほうが、ほかに一つも例のないような異例のことよりも起こりやすいというのは、常識が教えるところです。

これは余白の本文なので、その意味は文脈によって定まらず、その目的も見極めにくくなります。とりわけ私たちには、この余白の本文が、パウロの肯定することを述べているのか、それとも否定することを述べているのかがわかりません。そのため、この本文は本質的に、神学的あるいは実践的な議論の根拠としてはより不確かなものとなります。**もしかすると、これは、パウロがすぐ後の文脈で「自分を預言者と思う者」（37節）について語ったときに念頭に置いていた、偽りの預言なのかもしれません。** パウロが14章34-35節を自分の手で余白に書いたということは、ありそうにありません。彼の大きな字では、通常の余白にはそれほど多くの本文は収まらなかったでしょうから（ガラテヤ6:11、テサロニケ第二3:17）。もっとも、彼が書記にこの本文を余白に書くよう指示した可能性はあります。当時は、女性は公の場で語るべきではないという、圧倒的な文化的合意がありました。ですから、ほとんどどの読者が34-35節を余白に書いたとしてもおかしくありません。その人は、そうすることによって、すべての人が預言すべきだというパウロの繰り返しの勧めが女性にも当てはまることを防ごうとしたのでしょう。だれが、なぜ、いつこれらのことばを余白に書いたのかについては、私たちは推測することしかできません。ですから、それがパウロに由来するのかどうか――そしてもしそうなら、彼がそれに賛成しているのか反対しているのか――は疑わしいのです。**したがって、女性は教会で黙っていなければならないというこの命**

令は、規範的な神学や教会の実践を根拠づけるために用いられるべきではありません。実際、聖書翻訳にとって最も理にかなっているのは、この余白の書き込みを、それがほぼ確実に由来する場所、すなわち余白に、できれば脚注に置くことでしょう。

これらの節を余白に置くべきだと聞いて、驚く人もいるかもしれません。それが、伝えられてきた本文の信頼性に対する信頼を損なうのではないかと恐れるのです。しかし、その心配には根拠がありません。コリント人への手紙第一14章34-35節は特異な事例です。これほど大きな本文のまとまりが、もっともな説明もないまま、異なる写本でこれほど離れた位置に現れているのは、パウロの手紙の中でこの箇所だけなのです。ですから、ここで余白の本文であることを支持している写本上の証拠は、聖書のほかのどの段落についても同じように余白の本文と見なすことを正当化するものではありません。

聖書の無誤性[42]を堅持する学者の大多数は、多くの聖書に印刷されてはいても、もともとは本文になかった箇所がいくつかあると考えています。ですから問題は、節を余白に置くことが一度でもあってよいかどうかではなく、この特定の事例においてそうすることが正当化されるかどうかなのです。階層の支持者たちでさえ、いくつかの段落――比較的長いものも含めて――がもともとの本文に属していないことを認めています。その一つが、たとえば姦淫の場で捕らえられた女の物語です（ヨハネ7:53-8:11）。[43] 女性は教会で黙っているべきだという命令には、ヨハネの福音書7章53節-8章11節と多くの共通点があり、それらは、この命令もまた本文に属していないことを示唆しています。[44] 女性の沈黙についての段落が後から付け加えられたという想定には、姦淫の女の物語の場合よりも、さらに多くの明確な証拠があります。[45] これらすべての証拠を考えれば、J・A・フィッツマイヤー（J. A. Fitzmyer）によると**「今日の注解者の大多数」がコリント人への手紙第一14章34-35節を後の付加と見なしている**ことも、ほとんど驚くには当たりません。**そこには、ゴードン・フィー（Gordon Fee）のような指導的な福音派の本文批評学者も含まれています。**[46]

もしかすると、パウロはやはり、34-35節を余白に書くよう書記に指示したのかもしれません。その場合、これらの節と彼の教えとの間の矛盾は、次のことを示しています。彼がそうしたのはおそらく、すぐ後に続く36-37節の叱責の中で念頭に置いていた偽りの預言の内容を書き留めておくためだった、ということです。「神のことばは、あなたがたのところから出たのでしょうか」、そして「自分を預言者、あるいは御霊の人と思う者は、私があなたがたに書いていることが主の命令であると認めなさい」。だれがなぜこの本文を書いたにせよ、コリント人への手紙第一14章34-35節は、ほぼ確実に、最初は余白に書かれたものです。そして、パウロ以外のだれかによる後の付加である可能性が非常に高いのです。ですから、この箇所は、女性が教会で語ることを禁じるための根拠としては疑わしいものです。

3.5 結論

男女の平等についての聖書の言明、そして、男性と並んで、あるいは男性の上に立って権威を行使するよう神に召された女性についての言明は、明確であり、数多くあります。それらをすべて否定しようとする人は、雪崩に巻き込まれながら、こう考える人に似ています。「岩の塊も雪の塊も、一つずつ全部よけてやろう。どれも私には当たらない。」雪崩全体から逃れることはできませ

ん。同じように、神が与えられた男性と女性の同じ地位と権威について聖書全体が語っていることから、身をかわすことはできません。聖書は、男性にも女性にも、御霊が導かれるとおりに、またキリストが命じられたとおりに、へりくだって権威を行使するよう教えています。教会生活における男女の平等についての聖書の証拠は、否定しようがありません。この平等は、上で論じた、女性についてはっきりと扱っている箇所に表れているだけではありません。それは、聖書のあらゆる「互いに」の箇所と、事実上あらゆる命令と励ましを貫いています。聖書の言明と物語は私たちすべてに当てはまり、神は私たちが、心から、留保なしにそれに従って生きることを望んでおられます。聖書の教えとは無縁の、人間が作った性別の役割の境界線を越えてしまうことを恐れることなしにです。

著者について

フィリップ・B・ペイン（**PHILIP B. PAYNE**）、ケンブリッジ大学新約聖書学博士（PhD）。新約聖書の本文批評とイエスのたとえについての研究、そして著書 Man and Woman, One in Christ（Zondervan, 2009）で知られています。次の大学・神学校で新約聖書学を教えてきました。ケンブリッジ大学（University of Cambridge）、トリニティ神学校（Trinity Evangelical Divinity School）、ゴードン・コンウェル神学校（Gordon-Conwell Theological Seminary）、ベテル神学校（Bethel Seminary）、フラー神学校ノースウエスト（Fuller Seminary Northwest）。



4 推薦図書

4.1 ドイツ語の書籍

いくつかの本は、（現在のところ）古書でしか入手できません。

Bielefeld, Frauke. Die Sache mit der Rippe: Die himmlische Idee von den Geschlechtern. Asslar, 2007.

Bushnell, Katharine C. Wach auf Eva! Erkenne die biblische Wahrheit von Gottes ursprünglicher und unveränderter Absicht der vollen Gleichstellung der Frau. 注文：

christian@rvbeese.de

Cunningham, Loren, David Joel Hamilton. Warum nicht! Frauen in christlich-kirchlichen Führungspositionen. Altensteig, 2014.

Haubeck, Wilfrid, Wolfgang Heinrichs（編）. Pastorinnen: Aspekte zu einem aktuellen Thema. Theologische Impulse. Witten: Bundes-Verlag, 2008.

Krüger, Hartmut. Frauen im Pietismus: Ihr Dienst – ihre Verantwortung – ihr Einfluss. Marburg: Francke, 2005.

Ronsdorf, Hans-Jörg. 『Frauen, vergebt uns!』（『女性たちよ、私たちを赦してください！』）Was wir Männer wiedergutmachen müssen. Zur Rolle von Frau und Mann. 第4版, 2023. www.hans-joerg-ronsdorf.de

Schirrmacher, Thomas. Paulus im Kampf gegen den Schleier. Nürnberg: VTR, 2002.

Schmalenbach, Hanna-Maria. Frausein zur Ehre Gottes – im Kontext verschiedener Kulturen. Schwarzenfeld: Neufeld, 2007.

Wunderli, Armin. 「Ihm gegenüber」: Gleichberechtigung in der Kirche und was die Bibel dazu (nicht) sagt. KSH.Digital, 2022.

4.2 ドイツ語の論文

Jantsch, Torsten. 「Die Frau soll Kontrolle über ihren Kopf ausüben (1Kor 11,10). Zum historischen, kulturellen und religiösen Hintergrund von 1Kor 11,2–16」. 97–144頁、所収：Frauen, Männer, Engel: Perspektiven zu 1Kor 11,2–16. Torsten Jantsch 編. Biblisch-Theologische Studien 152. Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 2015.

Herter, H. 「Effeminatus」. Reallexikon für Antike und Christentum: Sachwörterbuch zur Auseinandersetzung des Christentums mit der antiken Welt 第4巻（1959年）, 620–650段. RAC. 全31巻. Stuttgart: Anton Hiersemann, 1950–2021.

4.3 英語の書籍

Barr, Beth Allison. The Making of Biblical Womanhood: How the Subjugation of Women Became Gospel Truth. Grand Rapids, MI: Baker, 2021.

Bartlett, Andrew. Men and Women in Christ: Fresh Light from the Biblical Texts. London: Inter-Varsity, 2019.

Bird, Michael F. Bourgeois Babes, Bossy Wives, and Bobby Haircuts: A Case for Gender Equality in Ministry. Fresh Perspectives on Women in Ministry. Grand Rapids, MI: Zondervan, 2012.

Clouse, Bonnidell, and Robert G. Clouse, eds. Women in Ministry: Four Views. With contributions from Robert D. Culver, Susan Foh, Walter Liefeld & Alvera Mickelsen. Downers

Grove, IL: InterVarsity, 1989.

Dale, Felicity. The Black Swan Effect: A Response to Gender Hierarchy in the Church. n.p.: Kingdom Heart, 2014.

Epp, Eldon Jay. Junia: The First Woman Apostle. Minneapolis, MN: Fortress, 2005.

Fee, Gordon D. The First Epistle to the Corinthians. NICNT. Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1987, rev. ed. 2014.

Giles, Kevin. Jesus and the Father: Modern Evangelicals Reinvent the Doctrine of the Trinity. Grand Rapids, MI: Zondervan, 2006.

Gupta, Nijay K. Tell Her Story: How Women Led, Taught, and Ministered in the Early Church. Downers Grove, IL: InterVarsity, 2023.

Hill, Graham Joseph. Holding Up Half the Sky: A Biblical Case for Women Leading and Teaching in the Church. Eugene, OR: Cascade Books, 2020.

Lee, Dorothy A. The Ministry of Women in the New Testament: Reclaiming the Biblical Vision for Church Leadership. Grand Rapids, MI: Baker, 2021.

McKnight, Scot. The Blue Parakeet: Rethinking How You Read the Bible. 2nd ed. Grand Rapids, MI: Zondervan, 2018.

Mickelsen, Alvera, ed. Women, Authority & the Bible. Downers Grove, IL: InterVarsity, 1986.

Osiek, Carolyn and Margaret Y. MacDonald with Janet H. Tulloch. A Woman's Place: House Churches in Earliest Christianity. Minneapolis, MN: Fortress, 2006.

Peppiatt, Lucy. Rediscovering Scripture's Vision for Women: Fresh Perspectives on Disputed Texts. Downers Grove, IL: IVP Academic, 2019.

Peppiatt, Lucy. Women and Worship at Corinth: Paul's Rhetorical Arguments in 1 Corinthians. Eugene, OR: Cascade Books, 2015.

Payne, Philip B. The Bible vs. Biblical Womanhood: How God's Word Consistently Affirms Gender Equality. Grand Rapids, MI: Zondervan, 2023. 249 pages.

Payne, Philip B. Man and Woman, One in Christ: An Exegetical and Theological Study of Paul's Letters. Grand Rapids, MI: Zondervan, 2009. 511 pages.

Payne, Philip B., and Vince Huffaker. Why Can't Women Do That? Breaking Down the Reasons Churches Put Men in Charge. Boulder, CO: Vinati Press, 2021. 175 pages.

Pierce, Ronald W., Cynthia Long Westfall, and Christa L. McKirland, eds. Discovering Biblical Equality: Biblical, Theological, Cultural & Practical Perspectives. 3rd ed. Downers Grove, IL: IVP Academic, 2021.

Williams, Terran. How God Sees Women: The End of Patriarchy. Cape Town, South Africa: Spiritual Bakery, 2022.

Witherington, Ben, III. Women and the Genesis of Christianity. Cambridge: Cambridge University Press, 1990.

Witt, William G. Icons of Christ: A Biblical and Systematic Theology for Women's Ordination. Waco, TX: Baylor University Press, 2020.

4.4 英語の論文

Davids, Peter H. "A Silent Witness in Marriage." Pages 224–238 in Discovering Biblical Equality: Complementarity Without Hierarchy. Edited by Ronald W. Pierce and Rebecca Merrill Groothuis. Downers Grove, IL: InterVarsity, 2004.

Giles, Kevin. "The Genesis of Confusion: How 'Complementarians' Have Corrupted Communication." Priscilla Papers 29, 1 (2015): 22–29.

Hugenberger, Gordon P. "Women in Church Office: Hermeneutics or Exegesis? A Survey of Approaches to 1 Tim 2:8–15." Journal of the Evangelical Theological Society 35, 3 (September 1992): 341–360.

Kroeger, Catherine Clark. "The Classical Concept of Head as 'Source'." Pages 267–283 in Gretchen Gaebelein Hull, Equal to Serve: Women and Men in the Church and Home. Old Tappan, NJ: Revell, 1987.

Payne, Philip B. "1 Tim 2.12 and the Use of οὐδέ to Combine Two Elements to Express a Single Idea." New Testament Studies 54, 2 (2008): 235–253. https://www.pbpayne.com/wp-admin/Payne2008NTS-oude1Tim2_12.pdf

Payne, Philip B. "The Authenticity of the Parable of the Sower and its Interpretation." Pages 163–207 in Gospel Perspectives: Studies of History and Tradition in the Four Gospels. Edited by R. T. France and David Wenham. Sheffield: JSOT, 1980.

Payne, Philip B. "The Authenticity of the Parables of Jesus." Pages 329–344 in Gospel Perspectives II. Edited by R. T. France and David Wenham. Sheffield: JSOT, 1981.

Payne, Philip B. "A Critique of Thomas R. Schreiner's Review of Man and Woman, One in Christ." https://www.pbpayne.com/a-critique-of-thomas-r-schreiners-review-of-man-and-woman-one-in-christ/

Payne, Philip B. "Critique of Vaticanus Distigme-obelos Denials." https://www.pbpayne.com/critique-of-vaticanus-distigmeobelos-denials/

Payne, Philip B. "Fuldensis, Sigla for Variants in Vaticanus, and 1 Cor 14.34–5." New Testament Studies 41 (1995): 240–262. https://www.pbpayne.com/wp-admin/Payne1995NTSFuldensis.pdf manuscript photographs https://www.pbpayne.com/wp-

content/uploads/2023/03/Fuldensis-1-Cor-14–15-photosscaled.jpeg https://www.pbpayne.com/wp-content/uploads/2023/03/Vaticanus-1-Cor-14.33–36-Jn-7.52-8.12–13-photos-scaled.jpeg

Payne, Philip B. “The Interpretation of 1 Timothy 2:11–15: A Surrejoinder.” Pages 96–115 in Part II of What Does the Scripture Teach About the Ordination of Women? A study commissioned by the Committee on Ministerial Standing. Minneapolis, MN: The Evangelical Free Church of America, 1986. https://www.pbpayne.com/wp-content/uploads/2020/07/Payne-Moo-Surrejoinder-EFCA-Ministerial.pdf

Payne, Philip B. “Is 1 Corinthians 14:34–35 a Marginal Comment or a Quotation? A Response to Kirk MacGregor.” Priscilla Papers 33, 2 (Spring 2019): 24–30. https://www.pbpayne.com/wp-content/uploads/2021/10/Is-1-Cor-14.34-35-Marginal-Comment-or-Quotation.pdf

Payne, Philip B. “Libertarian Women in Ephesus: A Response to Douglas J. Moo’s Article, ‘1 Timothy 2:11–15: Meaning and Significance.’ ” Trinity Journal 2 (1981): 169–197.

Payne, Philip B. “Ms. 88 as Evidence for a Text Without 1 Cor 14.34–5.” New Testament Studies 44 (1998): 152–158. https://www.pbpayne.com/wp-admin/Payne1998NTSMS88.pdf

Payne, Philip B. “Οὐδέ Combining Two Elements to Convey a Single Idea and 1 Timothy 2:12: Further Insights.” Pages 24–34 in Missing Voices. Minneapolis: CBE International, 2015. https://www.pbpayne.com/wp-content/uploads/2015/07/Payne-OUDE-CBE-ETS-final.pdf

Payne, Philip B. “The Seeming Inconsistency of the Interpretation of the Parable of the Sower.” New Testament Studies 26 (1979–1980): 564–568.

Payne, Philip B. “The Text-Critical Function of the Umlauts in Vaticanus, with Special Attention to 1 Corinthians 14.34–35: A Response to J. Edward Miller.” Journal for the Study of the New Testament 27, 1 (2004): 105–112.

Payne, Philip B. “Vaticanus Distigme-obelos Symbols Marking Added Text Including 1 Corinthians 14.34–5.” New Testament Studies 63, 4 (October 2017): 604–625. https://www.cambridge.org/core/journals/new-testament-studies/article/vaticanus-distigmeobelos-symbols-markingadded-text-including-1-corinthians-14345/A5FC01A6E14A2A1CF1F514A9BF93C581

Payne, Philip B. “What About Headship? From Hierarchy to Equality.” Pages 140–161, 226–232 in Mutual by Design: A Better Model for Christian Marriage. Edited by Elizabeth Beyer. Minneapolis: CBE International, 2017. https://www.pbpayne.com/wp-content/uploads/2018/06/what-about-headship-ch7.pdf

Payne, Philip B. “What Does Kephale Mean in the New Testament? Response.” Pages 118–132 in Women, Authority & the Bible. Edited by Alvera Mickelsen. Downers Grove, IL: InterVarsity,

1986.

Payne, Philip B. “Wild Hair and Gender Equality in 1 Corinthians 11:2–16.” Priscilla Papers 20, 3 (Summer 2006): 9–18. https://www.pbpayne.com/wp-admin/Payne2006PP1Cor11_2-16.pdf

Payne, Philip B. and Paul Canart. “Distigmai Matching the Original Ink of Codex Vaticanus: Do They Mark the Location of Textual Variants?” Pages 199–226 in Le manuscrit B de la Bible (Vaticanus graecus 1209): Introduction au fac-similé, Actes du Colloque de Genève (11 juin 2001), Contributions supplémentaires. Edited by Patrick Andrist. Lausanne, Switzerland: Éditions du Zèbre, 2009. https://www.pbpayne.com/wp-content/uploads/2010/07/HTB07_199_226.pdf

Payne, Philip B. and Paul Canart. “The Originality of Text-Critical Symbols in Codex Vaticanus.” Novum Testamentum 42, 2 (2000): 105–113. https://www.pbpayne.com/wp-admin/Payne2000NovT-Vaticanus_umlauts_1Cor14_34-35.pdf

Schmid, Ulrich. “Conceptualizing ‘Scribal’ Performances: Reader’s Notes.” Pages 49–64 in The Textual History of the Greek New Testament: Changing Views in Contemporary Research. Edited by Klaus Wachtel and Michael W. Holmes. Atlanta: SBL, 2011.

Spencer, Aída Besançon. “Leadership of Women in Crete and Macedonia as a Model for the Church.” Priscilla Papers 27, 4 (Autumn 2013): 5–15.

Thompson, Cynthia L. “Hairstyles, Head-coverings, and St. Paul: Portraits from Roman Corinth.” Biblical Archaeologist 51, 2 (June 1988): 99–115.

『女性たちよ、私たちを赦してください！』――私たち男性が償わなければならないこと

第4版（2023年7月）、約300頁、ペーパーバック13.80ユーロ。書店でISBN 978-3-9820715-5-8により注文できます。または著者に直接ご注文ください。

hj-ronsdorf@t-online.de または：www.hans-joerg-ronsdorf.de



『女性たちよ、私たちを赦してください！』の短縮版（第3版、80頁）は、ペーパーバックとして著者から3.80ユーロで、またAmazonのKindle電子書籍として2.90ユーロで入手できます。詳しくは www.hans-joerg-ronsdorf.de をご覧ください。

短縮版

女性たちよ、私たちを救してください！



結婚と教会における男
性と女性
短く。分かりやすく。役に立つ。
HANS-JÖRG RONSDORF



キャサリン・C・ブッシュネル（Katharine C. Bushnell、1855–1946年）は、「私を強くしてくださる方によって、私はどんなことでもできるのです」という聖句を生涯のモットーとした、勇気ある、賜物豊かな神のしもべでした。彼女は医師であり、宣教師であり、十字架の使者であり、改革者であり、著述家であり講演者であり、また七つの言語を話し、古代ギリシア語とヘブル語に精通した、優れた独創的な学者でもありました。ブッシュネルは医学の道を離れ、さらに重要だと考えた働き、すなわち19世紀の女性運動であったキリスト教婦人矯風会（Woman's Christian Temperance Union、WCTU）で指導的な役割を担うことによって、人々の屈辱的な生活条件を変える働きに取り組みました。女性の聖書的な位置づけは、ブッシュネルにとって大き

な意味を持っていました。誤訳こそが、女性が社会的にも霊的にも従属させられていることの原因であるという結論に至ったからです。1896年、彼女はWCTUを離れ、残りの生涯を、女性の完全な平等という、神の本来の、そして変わることのないご意図についての聖書の真理を書き記し、伝えるという務めにささげました。

書店または発行者から入手できます：christian@rvbeese.de

注

1. Man and Woman, One in Christ: An Exegetical and Theological Study of Paul's Letters, 2009; Why Can't Women Do That? Breaking Down the Reasons Churches Put Men in Charge, 2021; The Bible vs. Biblical Womanhood: How God's Word Consistently Affirms Gender Equality, 2023（「推薦図書」、46頁も参照）。
2. Vol 29, Nr.1, 2015年冬。
3. 4世紀のラオディキア教会会議の規定第11条。ほかの聖書外の資料でも、presbytidasは長老である女性を指しています。外典のマタイ行伝（28）や、3世紀と4世紀の碑文（「Angelos Epiktous Presbytidos」や「女性の長老たち」gynaikôn presbytidôn）がそうです。Bernadette J. Brooten, Women Leaders in the Ancient Synagogue: Inscriptional Evidence and Background Issues（『古代シナゴーグにおける女性指導者――碑文の証拠と背景の問題』）, BJS 36 (Atlanta: Scholars Press, 1982), 41–46頁は、女性の長老に言及する六つの碑文を引用しています。たとえば「ここに長老サラ・ウラが眠る」。これらの例は、パウロが女性の長老に言及することができたこと、そして教会史の初期に女性の長老がいたことを示しています。Philip B. Payne, The Bible vs. Biblical Womanhood (Grand Rapids, MI: Zondervan, 2023), 163–164頁も参照。
4. 「1 Timothy 2:11-15: Meaning and Significance」, Trinity Journal 1 (1980), 62–83頁。
5. Philip B. Payne, 「Libertarian Women in Ephesus: A Response to Douglas J. Moo's Article, 『1 Timothy 2:11-15: Meaning and Significance』」, Trinity Journal 2 (1981), 169–197頁。
6. あるいは「同権」(Gleichberechtigung)、「同格」(Gleichrangigkeit)、「同等の価値」(Gleichwertigkeit)。
7. Philip B. Payne, Man and Woman, One in Christ (Grand Rapids: Zondervan, 2009), 41–54頁は、創世記1-3章に男性の権威を読み込もうとする試みの弱さを示しています。
8. 16回。出エジプト18:4、申命33:7, 26, 29、詩篇20:3; 33:20; 70:6; 89:20; 115:9, 10, 11; 121:1, 2; 124:8; 146:5、ホセア13:9。この表現の背景についてさらに詳しくは、Aída B. Spencer, Beyond the Curse: Women Called to Ministry (Grand Rapids: Baker, 1985), 23–29頁を参照。
9. Ludwig Koehler, Walter Baumgartner, Johann Jakob Stamm, Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament（以下HALOT）, 全5巻 (Leiden: Brill, 1994–2000), 第2巻 (1995): 811–812頁。
10. イザヤ30:5、エゼキエル12:14、ダニエル11:34。Spencer, Beyond the Curse, 23–29頁は、さらに詳しい点に触れています。
11. これは次の論考の主張に反します。Raymond C. Ortlund Jr., 「Die Gleichheit von Mann und Frau und Das Hauptsein des Mannes – 1. Mose 1-3」, in Die Rolle von Mann und Frau in der Bibel (Friedberg: 3L-Verlag, 2008), 115–137頁。
12. あるいは HALOT 2:667-68によれば「指揮者、指導者、君主……将校……町の長……廷臣……家長……名士……祭儀の職務者……大祭司……監督者……長……ヤハウェによって立てられたイスラエルの指導者」。この語は、サウル、ダビデ、ソロモンのイスラエル支配について用いられています（サムエル第一9:16; 13:14、列王第一1:35）。
13. Payne, Man and Woman, 41–54頁は、創造の中に男性の権威を見いだそうとする試みを批判しています。
14. **創世記のどこにも、男性に女性に対する権威を与える「創造の秩序」は教えられていません。** 神は人間に、それ以前に創造された植物と動物に対する支配を与えられました。神が後から生まれた者に指導を委ねられることはたびたび繰り返されており、それは古代オリエントの長子権の慣習に反しています。イシュマエルに対するイサク、エサウに対するヤコブ、兄たちに対するヨセフ、アロンに対するモーセ、兄たちに対するダビデ、などです。パウロが、女性は男性から出たと語るとき（コリント第一11:8, 12、またテモテ第一2:13で暗に）、それは、女性であれ男性であれ、自分の出どころに対して払うべき敬意を示すためです（コリント第一11:3, 12）。Payne, Man and Woman, 113–139頁, 402-50頁参照。
15. John Piper und Wayne Grudem, 「Menschlichkeit, Verständlichkeit und Hoffnung - die Kontroverse und die Sache Christi」, in Die Rolle von Mann und Frau, 493–520頁、ここでは502頁。

16. ジョージ・W・ナイト三世（George W. Knight III）は、これは「独裁的で愛のない仕方での支配」だと主張しています（「Die Familie und die Gemeinde: Wie sollte biblisches Mannsein und Frausein in der Praxis aussehen?」, in Die Rolle von Mann und Frau, 417–432頁）。パイパーとグルーデムは、これは「堕落した支配」であって「神が望まれたかしらの立場」ではないと主張しています（「Menschlichkeit」, 502頁）。また、ウェイン・グルーデムは「創世記3章16節に示唆されている種類の過酷な支配」について語っています（Evangelical Feminism and Biblical Truth [Sisters: Multnomah, 2004], 123頁、注45。40頁、43頁も参照）。グルーデムは、辞書上の根拠なしにこの「支配」を「過酷な」と呼んではならないことを知っているはずです。というのも、その2頁前（38頁、注27）で、彼自身が一つの誤りを認めているからです。彼は辞書上の根拠なしに、同じ節にある別の語が「敵対的あるいは攻撃的な欲求」を意味すると主張していたのです。
17. HALOT 2:647–48 および Francis Brown, S. R. Driver, Charles A. Briggs, A Hebrew and English Lexicon of the Old Testament (Oxford: Clarendon, 1906), 605頁。
18. たとえばレビ18:3; 20:23、詩篇106:35。
19. Richard Bauckham, Gospel Women: Studies of the Named Women in the Gospels (Grand Rapids: Eerdmans, 2002) を参照。
20. F. F. Bruce, The Acts of the Apostles: The Greek Text with Introduction and Commentary (第2版; Grand Rapids: Eerdmans, 1952), 296頁は、偽クレメンス説教集がヤコブを「『監督たちの監督』、またエルサレム教会と、神の摂理によって正しく設立された至るところのすべての教会の長」と呼んでいることを指摘しています。
21. パウロは使徒を次のように定義しています。復活のキリストに出会い（コリント第一9:1; 15:8、ガラテヤ1:1, 15-17）、福音を宣べ伝える任務を受け、宣教の働きの労苦と苦難を担う人です（ローマ1:1-5、コリント第一1:1; 15:10。ユニアはパウロと共に獄中にいました。ローマ16:7）。この働きは実を結び（コリント第一9:1; 15:10）、「しるしと不思議と力あるわざ」によって確証されます（コリント第二12:11-12）。いくつかの翻訳は、ローマ16章7節でこれを男性名「ユニアス」（Junias）にしています。しかし証拠は圧倒的多数で女性名「ユニア」（Junia）を支持しています。**教会の最初の千年間の信頼できる証言はすべて、一致してユニアを女性と見ています。** Eldon J. Epp, Junia: The First Woman Apostle (Minneapolis: Fortress, 2005), 23–81頁の優れた研究を参照。
22. ギリシア語**prostatis**（「長」）は、「地位において前に」と「立つ」を表す語から成っています。ここで問題になりうる新約聖書の関連語の意味は、すべて指導に関わるものです。テトスへの手紙3章8節、14節の「関心を持つ」は、ここには当てはまりません。C. K. Barrett, The Epistle to the Romans (New York: Harper & Row, 1957), 283頁は、「**パトロン**」という解釈に反対しています。「フィベはパウロに対してそのような関係にあったはずはない（彼は自由人として生まれたのだから。使徒22:28）」からです。新約聖書は、ギリシア文献一般と同様に、「恩人」という考えやその行いを、通常は別の語で表現します。それらの語は、「良い」と「行い」を表すギリシア語の一般的な語から成っています。ルカ22:25、使徒4:9; 10:38、BDAG 405、LSJ 712、Payne, Man and Woman, 62–63頁参照。
23. 特に Epp, Junia, 23–44頁, 69–78頁、および Bauckham, Gospel Women, 165–186頁を参照。
24. これについては Payne, Man and Woman, 69–76頁を参照。
25. Payne, Man and Woman, 79–104頁は、ガラテヤ人への手紙3章28節の文化的、歴史的、神学的、文学的な文脈から、このテキストを教会生活から切り離してはならないことを示す42の理由を挙げています。
26. 標準的なギリシア語辞書は、（いくつかの聖書で用いられている）「独立している」という訳を支持していません。「独立している」は、「しかし」が求める対比を表してもいません。また、独立性は、特に「主にあって」当てはまるようなものではありません。
27. Payne, Man and Woman, 113–215頁、および Philip B. Payne, 「Wild Hair and Gender Equality in 1 Corinthians 11:2–16」（「乱れた髪と男女の平等――コリント人への手紙第一11章2-16節」）, Priscilla Papers 20, Nr. 3 (2006年夏): 9–18頁を参照。
28. Richard B. Hays, First Corinthians (Louisville: John Knox, 1997), 131頁。
29. 階層の支持者であるジョージ・W・ナイト三世（George W. Knight III）でさえ、これに同意しています。「Ehemänner und Ehefrauen: Eine Parallele zu Christus und der Gemeinde – Epheser 5,21-33 und Kolosser 3,18-19」, in Die Rolle von Mann und Frau, 203–220頁を参照。
30. Payne, Man and Woman, 117–137頁は、「源」がギリシア語の「かしら」（kephale）の一般的な意味であったのに対し、「権威」や「指導者」はそうではなかったことを示しています。
31. Payne, Man and Woman, 319–397頁は、この訳の正しさを擁護しています。
32. A Greek–English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature, 第3版 (BDAG)。

33. Henry Scott Baldwin, 「An Important Word: αὐθεντέω in 1 Timothy 2:12」, in Women in the Church: An Analysis and Application of 1 Timothy 2:9-15（編者 Andreas J. Köstenberger, Thomas R. Schreiner; 第2版; Grand Rapids: Baker, 2005), 49–51頁。**2章12節の語が明らかに「権威を行使する」を意味する最古の用例は、紀元370年ごろのものです（バシレイオス『書簡』69、45行)。パウロの時代には、この語は「支配する」、あるいは認められても委任されてもいない「権威を僭取する」のいずれかを意味しえました。Payne, Man and Woman, 361–397頁は、この動詞の用例と意味、そしてテモテへの手紙第一2章12節におけるその用法を詳しく記録しています。**

34. Philip B. Payne, 「1 Tim 2:12 and the Use of οὐδέ to Combine Two Elements to Express a Single Idea」, NTS 54 (2008): 235–253頁、および Philip B. Payne, 「Οὐδέ Combining Two Elements to Convey a Single Idea: Further Insights」, in Missing Voices: Broadening the discussion on men, women, and ministry (Minneapolis: Christians for Biblical Equality, 2014), 24–34頁。

35. たとえばクリュソストモス、テモテへの手紙第一3章2節についての説教。Grudem, Evangelical Feminism, 80頁は、ヨセフスとラビ文献を引用しています。グルーデムは、「一人の妻の夫」は「独身の男性（イエスやパウロのような）を長老になることから除外する意図はない」と正しく論じています。そこから必然的に導かれるのは、「一人の妻の夫」がすべての長老を言い表すことはできない、ということです。これは、「一人の妻の夫」は「すべての」執事に必要な前提条件であり、それゆえ女性を除外する、というグルーデムの主張（263頁、注107）に矛盾します。グルーデムは、テモテへの手紙第一3章12節のギリシア語にはそのような語がないにもかかわらず、誤って「すべての」を付け加えています。Douglas J. Moo, 「The Interpretation of 1 Timothy 2:11-15: A Rejoinder」, TJ 2 NS (1981): 198–222頁, 211頁は、「一人の妻の夫」は必ずしも「未婚の男性や女性をこの職から除外する必要はない……この言い回しが明確に女性を除外していると主張するのは行き過ぎであろう」と認めています。しかし、それに続く「それは、パウロが書いたとき男性を念頭に置いていたことを示唆している」という彼の言明は、一つの意味においてしか当たっていません。パウロは、一夫多妻の者や不貞な男性を除外することを考えていたのです。しかし、すべての監督が男性でなければならないという要求を考えていたのではありません。**トーマス・R・シュライナー（Thomas R. Schreiner）**, 「Philip Payne on Familiar Ground: A Review of Philip B. Payne, Man and Woman, One in Christ: An Exegetical and Theological Study of Paul's Letters」, Journal of Biblical Manhood and Womanhood (2010年春): 33–46頁, 35頁は、こう認めています。「**テモテへの手紙第一3章1-7節とテトスへの手紙1章6-9節にある長老の要件は、彼らが一人の妻の夫であるべきだという言明も含めて、それ自体としては、女性が長老として仕えうることを必ずしも排除するものではない。**」

36. この一覧のほかのどの項目も、二重の意味を持ってはいません。Payne, Man and Woman, 445–459頁参照。

37. たとえば、ここと同じ主語「だれでも」（**tis**）を用いているもの。マルコ8:34; 9:35、ルカ9:23; 14:25-26、ヨハネ7:37-38; 9:31; 11:10; 12:26, 26, 47; 14:23、ローマ8:9、コリント第一3:12-15; 3:17; 5:11; 8:3, 10; 10:28; 14:24-25、コリント第二10:7、ガラテヤ6:3-5、テサロニケ第二3:14、テモテ第一5:8; 6:3-5、テモテ第二2:21、ヤコブ1:5-8、黙示録3:20。

38. Gordon P. Hugenberger, 「Women in Church Office: Hermeneutics or Exegesis? A Survey of Approaches to 1 Timothy 2:8–15」, JETS 35, no. 3 (1992): 341–360頁, 360頁、注78。

39. Armin D. Baum, 「Paul's Conflicting Statements on Female Public Speaking (1 Cor. 11:5) and Silence (1 Cor. 14:34-35): A New Suggestion」, Tyndale Bulletin 65.2 (2014): 252–271頁を参照。

40. Gordon D. Fee, The First Epistle to the Corinthians (rev. ed.; NICNT; Grand Rapids: Eerdmans, 2014), 699頁。紀元375年ごろのアンブロシアステルも含みます。

41. これは、聖書の本来の本文を確定する際の基本原則、「ベンゲルの第一原則」として知られるものの適用です。それはこう述べています。「ほかのすべての本文の成立を最もよく説明する本文が、最も高い確率で本来の本文である。」J. C. F. Steudel 編, Gnomon of the New Testament by John Albert Bengel (James Bandinel 訳; 復刻 Edinburgh: T. & T. Clark, 1858), 第1巻, 13–19頁を参照。

42. 「聖書の無誤性に関するシカゴ声明」の第10条にはこうあります。「私たちは、霊感は厳密に言えば聖書の原本の本文にのみ当てはまり、その本文は神の摂理によって、入手可能な写本から高い正確さをもって確定することができると断言する。私たちはさらに、聖書の写本と翻訳は、それらが原本を忠実に表しているかぎりにおいて神のことばであると断言する。」同様に第6条にはこうあります。「私たちは、聖書の全体とそのすべての部分が、原本のことばに至るまで、神の霊感によって与えられたものであると断言する。」ですからここでは、霊感は本来のことばについてだけ断言されているのであって、後の付加については断言されていないのです。

43. D. B. Wallace, 「Reconsidering 『The Story of Jesus and the Adulteress Reconsidered』」, NTS 39 (1993): 290–296頁。D. A. Carson, The Gospel according to John (PNTC; Grand Rapids: Eerdmans, 1991), 333頁はこう書いています。「それ［ヨハネの福音書7章53節-8章11節］を含んでいる［写本］は、かなり高い頻度で異読を示している。……配置の多様さは、これらの節が真正でないことを裏づけている。」ところが同じカー

ソンが、フィーが同じ原則をコリント人への手紙第一14章34-35節に適用したことを、矛盾したことに「弱く、思弁的だ」と呼んでいます。「『Silent in the Churches』: On the Role of Women in 1 Corinthians 14:33b–36」, 所収：Recovering Biblical Manhood and Womanhood, 140–153頁、ここでは142頁。

44. たとえば、どちらのテキストにも次のような特徴が見られます。多くの異読、写本における異なる配置、その書の著者には典型的でない語の用い方、思考の流れあるいは主題の中断、そして写字生が本文の問題に気づいていたことを示す余白の記号や書き込みです。さらに、新約聖書の最も重要な写本であるヴァティカン写本は、どちらの場合にも、まさにそれぞれの段落が始まる箇所に、異読を示す記号を持っています。Payne, Man and Woman, 232–256頁は、これらの特徴を説明しています。
45. この段落は、この章の語を、異質な、パウロらしくない意味で用いています。このテキストは、教会における教えの目的に反しています。「律法も言っているように」という言い回しは、パウロの神学にも文体にも合いません。この段落は、パウロがふだんは擁護している弱い社会集団（女性たち）を従属させています。その語彙は、後のテキストであるテモテへの手紙第一2章11-15節の語彙に似ています。コリント人への手紙第一の中で、「諸教会において」の人々に向けられているのはこれらの節だけです。さらに、この段落は、そのような付加のありそうな動機、すなわち女性を黙らせるという動機に合致しています。Payne, Man and Woman, 257–265頁は、これらの逸脱を説明しています。
46. Joseph A. Fitzmyer, First Corinthians (New Haven: Yale, 2008), 500頁。Kim Haines-Eitzen, The Gendered Palimpsest: Women, Writing, and Representation in Early Christianity (New York: Oxford, 2012), 62頁は、このことを「今日のほとんどすべての学者」について述べています。少なくとも62の本文研究が、これが後の付加であると論じています。Payne, Man and Woman, 226–227頁、その理由については225–267頁、Fee, First Corinthians, 780–792頁を参照。